

第2章

母親の教育・子育てに関する意識



真田 美恵子 (1～3、7節)

田村 徳子 (4、6節)

荒牧 美佐子 (5節)



第1節 母親の子育て観

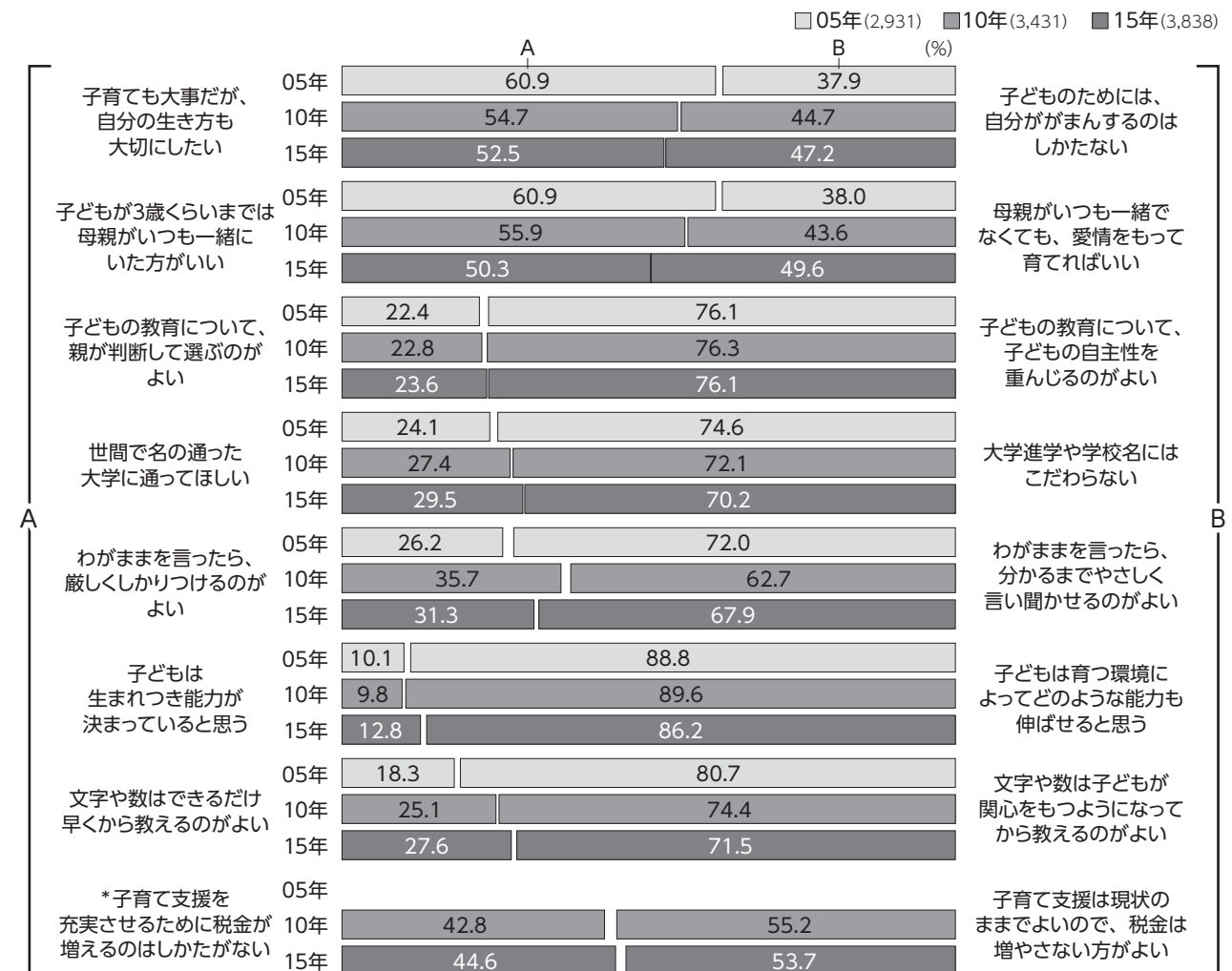
この10年間で、自分の生き方より子育てを優先する母親、子どもといつも一緒になくても愛情をもって育てればよいと考える母親、文字や数はできるだけ早くから教えるのがよいと考える母親が増加している。

●子育て観が変化している

本節では母親の子育て観に関して、05年からの10年間で、どのような変化があったのかをみていきたい。子育てや子どもの教育に関するAとBの2つの意見のうち、母親の気持ちに近いほうを選択してもらった結果が図2-1-1である。

まず、子育てと自分自身の生き方について、「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」と考える母親は05年では60.9%だったが、15年では52.5%と8.4ポイント減少した。その一方で、「子どものためには、自分がかまふするのはしかたない」は05年では37.9%だったが、15年では47.2%と9.3ポイント増加した。10年調査と比較して、15年調査ではこの2つの考え方

図2-1-1 母親の子育て観（経年比較）



注1) 0歳6か月～6歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
 注2) 無答不明があるため、Aの意見とBの意見の数値を合計しても100%にはならない。
 注3) *は10年調査以降の項目。
 注4) ()内はサンプル数。
 注5) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

は同率に近い。子どもや子育てをより重視する母親の気持ちだが、この結果に表れたと考えられる。次に、いわゆる「3歳児神話」に関する項目である「子どもが3歳くらいまでは母親がいつも一緒にいた方がいい」を支持する比率は、05年では60.9%だったが、15年では50.3%と10.6ポイント減少した。「母親がいつも一緒になくても、愛情をもって育てればいい」は05年では38.0%だったが、15年では49.6%と11.6ポイント増加した。愛情をもって子育てをすれば、3歳まで子どもといつも一緒にいなくても大丈夫であるとする母親が10年間で増加しており、「3歳児神話」を信じている母親とほぼ半数ずつの選択率となった。子育てに向き合う母親の考えが変化してきているといえるだろう。

次に10年間で大きな変化のあった、教育に関する意識をみていく。文字や数の習得について、「文字や数はできるだけ早くから教えるのがよい」と考える母親は05年の18.3%から9.3ポイント増加し、15年では27.6%となった。「文字や数は子どもが関心をもつようになってから教えるのがよい」と考える母親は05年の80.7%から15年では71.5%に減少した。子どもの進学に対する期待では、「世間で名の通った大学に通ってほしい」と考える母親の比率が増加傾向である(05年24.1%→15年29.5%)。子どもの学歴を重視する傾向や、早い時期から文字や数を教えたほうがよいと考える母親

の比率は、10年間を通して一貫して増加している。「子どものためには、自分ががまんするのはしかたない」を支持する比率が増加していることとあわせて考えると、母親が、自分の生き方よりも子どもの教育や進路をより重視しながら育児をする傾向が高まっていることがうかがえる。

また10年調査で新たに質問項目を追加した、子育て支援のための税金の使い方については、「子育て支援を充実させるために税金が増えるのはしかたがない」という考え方を支持する母親は15年には44.6%で、「子育て支援は現状のままでよいので、税金は増やさない方がよい」と増税に賛成しない母親は53.7%であった。これらの項目については10年から大きな変化はみられず、意見が分かれている。

●「文字や数はできるだけ早くから教えるのがよい」と考える0歳児の母親が増加

次に、子どもの年齢別に、母親の子育て観の経年変化を確認してみよう。ここでは、変化が大きかった母親自身の生き方と子育ての方針、文字や数を教える時期に着目し、子どもの年齢別の経年変化を記述する(表2-1-1)。

まず、「子育ても大事だが、自分の生き方も大切に

表2-1-1 母親の子育て観(子どもの年齢別 経年比較)

		(%)						
		0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	6歳児
A. 子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい	05年	57.8	57.6	57.3	60.5	69.0	57.8	65.0
	10年	50.6	55.4	54.4	56.9	53.7	56.0	54.0
	15年	54.9	52.0	51.4	47.3	51.2	56.8	55.4
B. 子どものためには、自分ががまんするのはしかたない	05年	41.6	41.9	41.9	38.3	30.0	39.7	33.5
	10年	49.1	44.0	45.4	42.6	45.6	42.8	45.6
	15年	45.1	48.0	48.2	52.5	48.6	42.6	44.1
A. 文字や数はできるだけ早くから教えるのがよい	05年	32.9	26.3	22.2	17.2	10.8	11.9	14.3
	10年	40.6	33.3	28.7	21.3	20.9	15.1	22.9
	15年	47.8	37.3	28.5	22.3	20.1	21.9	25.2
B. 文字や数は子どもが関心をもつようになってから教えるのがよい	05年	66.5	73.3	77.3	81.9	88.2	85.6	84.6
	10年	59.1	65.6	70.8	78.0	78.6	84.5	76.7
	15年	51.5	62.4	70.4	76.9	79.0	77.1	73.4

注1) 0歳6か月～6歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
 注2) 8対の項目のうち2対の項目を表示。
 注3) 無答不明があるため、Aの意見とBの意見の数値を合計しても100%にはならない。
 注4) 子どもの年齢別のサンプル数は以下のとおりである。

(人)							
	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	6歳児
05年	324	649	730	333	307	322	266
10年	319	538	479	537	561	494	503
15年	268	588	564	594	581	629	614

注5) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

たい」を選択した母親の比率をみると、子どもの年齢を問わずに10年前より減少している。その中でもっとも変化が大きかったのが、4歳児の母親であった。05年の69.0%から15年では51.2%へ17.8ポイント減少した。一方で、「子どものためには、自分がかまするのはしかたない」は、05年では30.0%だったのが15年では48.6%と、18.6ポイント増加している。

また、「文字や数はできるだけ早くから教えるのがよい」と考える母親は、子どもの年齢を問わずに10年前より増加している。とくに0歳児の母親では、05年の32.9%から15年では47.8%へと14.9ポイント増加した。一方で、「文字や数は子どもが関心をもつようになってから教えるのがよい」と考える比率は15年では51.5%に減少しており、この2つの考え方に対する支持が同率に近づいてきている。

●「子どものためには、自分がかまん」と考えるパートタイム、専業主婦の母親が増加

母親の就業状況別の経年変化を表2-1-2にまとめた。「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」については、パートタイムの母親では10年間で70.8%から56.3%へ、専業主婦の母親は57.3%から44.6%へといずれも10年間で10ポイント以上減少した。常勤者の母親は10年間であまり変化がみられない。

その一方で、パートタイム、専業主婦の母親のいずれにおいても、「子どものためには、自分がかまん」と考える層が増加している。この変化の背景には何があるのだろうか。

都市部を中心に待機児童が課題となる中、首都圏を対象にした本調査でも05年から15年の10年間で、働く母親が増え、専業主婦の比率は68.4%から51.1%に減

表2-1-2 母親の子育て観（母親の就業状況別 経年比較）

		(%)		
		常勤者	パートタイム	専業主婦
A. 子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい	05年	68.9	70.8	57.3
	10年	64.4	58.2	50.4
	15年	67.8	56.3	44.6
B. 子どものためには、自分がかまんするのはしかたない	05年	31.1	27.5	41.3
	10年	35.0	40.3	49.3
	15年	32.0	43.7	55.2
A. 世間で名の通った大学に通ってほしい	05年	25.5	20.9	24.6
	10年	31.5	20.4	27.9
	15年	35.0	23.9	29.4
B. 大学進学や学校名にはこだわらない	05年	74.5	77.6	73.9
	10年	67.6	79.0	71.9
	15年	65.0	76.0	70.5
A. 文字や数はできるだけ早くから教えるのがよい	05年	16.4	20.1	18.1
	10年	23.0	23.5	25.1
	15年	28.7	27.7	26.1
B. 文字や数は子どもが関心をもつようになってから教えるのがよい	05年	83.6	78.4	80.7
	10年	76.4	75.6	74.4
	15年	70.9	71.9	73.6

注1) 0歳6か月～6歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
 注2) 8対の項目のうち3対の項目を表示。
 注3) 無答不明があるため、Aの意見とBの意見の数値を合計しても100%にはならない。
 注4) 母親の就業状況別のサンプル数は以下のとおりである。

(人)			
	常勤者	パートタイム	専業主婦
05年	248	290	2072
10年	464	491	1966
15年	695	579	1981

注5) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

少した。そのような状況下で、専業主婦として「あえて」働かないことを選択した一部の母親において、「子どものために」今はがまんするという考えを支持する比率が増えているとはいえないだろうか。

また常勤者の母親については、専業主婦の家庭よりも父親の帰宅時間が早く（図示省略）、子育ての関わりも比較的多い傾向があるため（3章2節より）、ある程度は父親の協力を得ながら仕事と育児の両立をしている状況がうかがえる。

一方、パートタイムの母親については、父親の子育てへの関わりが常勤の母親の家庭よりも少ない（3章2節より）。そのため、仕事をもっている、子育てを中心に生活のバランスをとらざるをえない母親も少なくないと考えられる。さらに、パートタイム世帯の年収は05年調査より減少する傾向があり（図示省略）、家族のために働かざるを得ない母親も増えていることがうかがえる。このような状況が、「子どものためには、自分ががまんする」という比率の増加につながっているのではないだろうか。ただし、いずれも仮説であり、母親の就業状況別の子育て観の変化の違いについては、今後さらなる検証が必要である。

● 「世間で名の通った大学に通ってほしい」「文字や数はできるだけ早くから教えるのがよい」と考える常勤の母親が増加

「世間で名の通った大学に通ってほしい」については、いずれの就業状況の母親でも増加傾向がみられた。とくに常勤の母親の選択率は、05年の25.5%から15年では35.0%と約10ポイント増加した。常勤の母親は、パートタイムや専業主婦の母親よりも増加率が大きく、子どもを有名大学に進学させたい志向が強まっている。文字や数を教える時期も、いずれの就業状況の母親でも「できるだけ早く教えるのがよい」と考える比率が増えているが、とくに常勤の母親は05年16.4%から15年28.7%へと12.3ポイント増加した。05年から15年にかけて、常勤の母親の大学卒業率（短期大学・四年制大学・大学院卒業の比率）が上昇している（図示省略）。常勤の母親の考え方の変化の背景には、こうした学歴の変化が関連している可能性があるかと推測される。



第2節 今、子育てで力を入れていること

この10年間、他者への思いやりや親子のふれあい、生活習慣に力を入れる比率は一貫して高い水準を維持している。しかし、「友だちと一緒に遊ぶこと」に「とても」力を入れる比率は10年前の調査から5.8ポイント減少した。

●上位に変化はないが、「友だちと一緒に遊ぶこと」が減少、「数や文字を学ぶこと」が増加の傾向

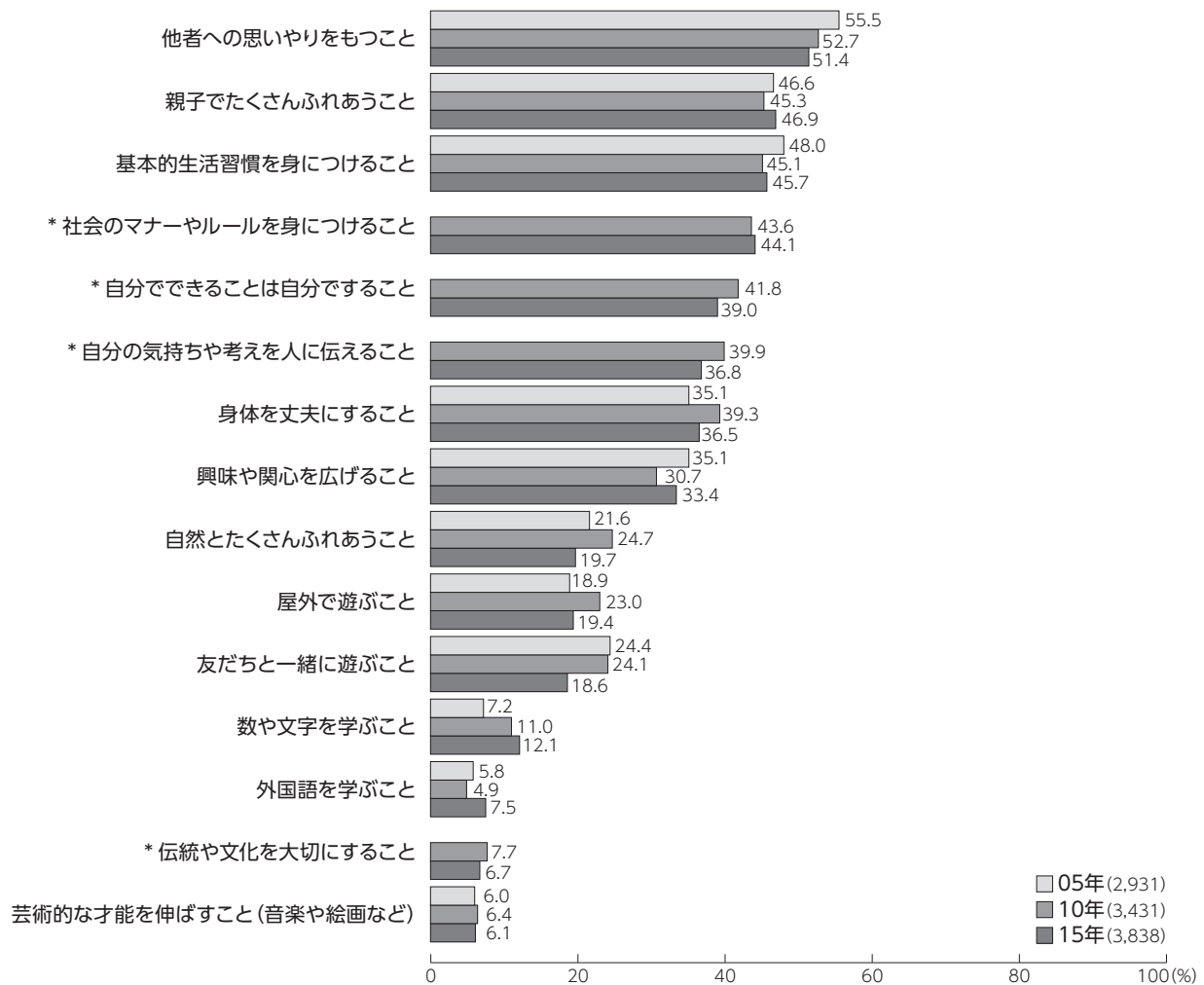
前節では、母親の子育てに関する意識・価値観の経年変化をみた。本節では、母親たちが今、どのようなことに力を入れて子育てをしているのかについて経年比較をする。図2-2-1は母親が子育てで力を入れていることについて、「とても力を入れている」と答えた比率の

10年間の変化を示したものである。その結果、以下の5点の特徴がみられた。

1点目として、上位3項目は10年間で変化がなかった。それは「他者への思いやりをもつこと」(05年55.5%→15年51.4%)、「親子でたくさんふれあうこと」(05年46.6%→15年46.9%)、「基本的な生活習慣を身につけること」(05年48.0%→15年45.7%)である。

2点目として、10年調査で追加した社会ルールの習

図2-2-1 子育てで力を入れていること (経年比較)



注1) 「とても力を入れている」の%。
 注2) 0歳6か月～6歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
 注3) *は10年調査以降の項目。
 注4) ()内はサンプル数。
 注5) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

得、自立、自己の表現に関する項目は10年も15年も約4割の選択率とほぼ変わらず、15項目の中で上位であった。具体的には「社会のマナーやルールを身につけること」「自分でできることは自分ですること」「自分の気持ちや考えを人に伝えること」の項目である。これらの結果から、子育てで力を入れることの上位は、経年で大きな変化はみられないことがわかる。

3点目として、「友だちと一緒に遊ぶこと」が10年前と比較して唯一、5ポイント以上の変化があった項目であった。05年では24.4%であったが、15年では18.6%と5.8ポイント減少した。これは1章5節で示した「平日、(幼稚園・保育園以外で)一緒に遊ぶ人」について「友だち」が減少したと関係があると考えられる。共働き世帯の増加による保育の長時間化や少子化の影響を受け、園以外で友だちと一緒に遊ぶ機会が少なくなったことにより、子どもの友だちづきあいに関する母親の意識が弱くなっている可能性が考えられる。

4点目として、数や文字の学習を重視する母親が増加している。「数や文字を学ぶこと」について、数値は低いものの、05年の7.2%から10年には11.0%、15年には12.1%と増加している。前節で「文字や数はできるだけ早くから教えるのがよい」という考えを支持する比率が増加したことを示したが、本調査が示す結果はこうした教育観とも整合的である。幼児の子育てにおいて、数や文字の習得を重視する母親が増えているといえるだ

ろう。

5点目として、05年から10年にかけて、外遊びやからだづくりをより重視する傾向がみられたが、15年では05年時点の水準に戻っている。具体的な項目としては、「自然とたくさんふれあうこと」(05年21.6%→10年24.7%→15年19.7%)、「屋外で遊ぶこと」(05年18.9%→10年23.0%→15年19.4%)、「身体を丈夫にすること」(05年35.1%→10年39.3%→15年36.5%)であった。

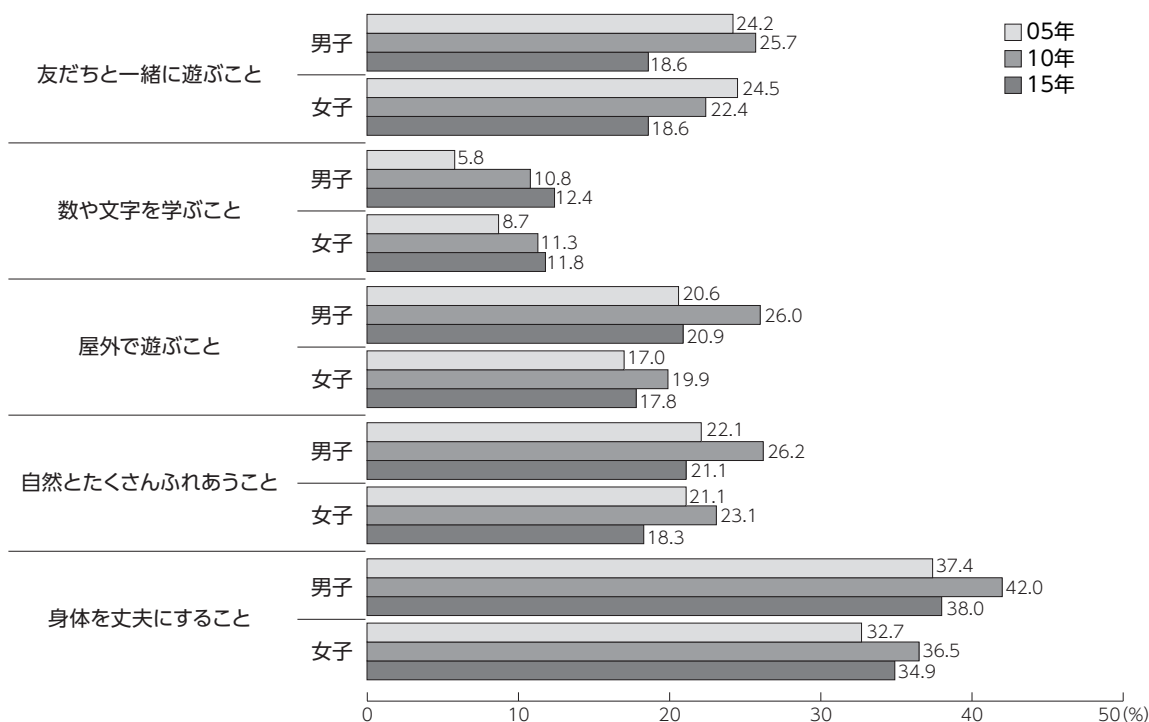
●「友だちと一緒に遊ぶこと」は性別問わずに減少、「数や文字を学ぶこと」は男子の母親で増加の傾向

次に、子育てにおいて重視することについて、子どもの性別での経年変化をみていく。ここでは変化がみられた項目に着目した。図2-2-2から以下のことがわかった。

1点目は、「友だちと一緒に遊ぶこと」に「とても力を入れている」比率について、性差はなく、経年変化においても性別での大きな違いはみられなかった。男女いずれの母親でも、この項目を選択する比率は減少していた。

2点目は、「数や文字を学ぶこと」について、とくに男子の母親で「とても力を入れている」比率が10年間で増加した(05年5.8%→15年12.4%)。女子は05年

図2-2-2 子育てで力を入れていること (性別 経年比較)



注1) 「とても力を入れている」の%。
 注2) 0歳6か月～6歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
 注3) 15項目のうち5項目を図示。
 注4) サンプル数は05年男子1,461人、女子1,470人、10年男子1,694人、女子1,737人、15年男子1,890人、女子1,948人。
 注5) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

では8.7%、15年では11.8%であり、男子の母親の増加率のほうが大きかった。

3点目は、外遊びやからだづくりを重視する傾向は05年から10年にかけてとくに男子の母親において増加したが、10年から15年にかけては減少して、05年時点の水準に戻った。「自然とたくさんふれあうこと」については、女子の母親も10年23.1%から15年18.3%へ4.8ポイント減少した。

●「友だちと一緒に遊ぶこと」は子どもの年齢を問わずに減少、「数や文字を学ぶこと」は0歳児と5歳児でとくに増加

子育てにおいて重視することについて、子どもの年齢別に経年変化をみていく(表2-2-1)。「友だちと一緒に遊ぶこと」は、いずれの年齢でも15年の数値がもっとも低かった。とくに、1~4歳児においては、10年

から15年にかけて5ポイント以上減少した。他に「屋外で遊ぶこと」「自然とたくさんふれあうこと」も、年齢を問わずに10年から15年にかけて減少している。

一方で、「数や文字を学ぶこと」は、10年間で、いずれの年齢でも「とても力を入れている」比率が高くなっていった。とくに0歳児では、05年2.2%だったが、10年5.8%、15年10.1%と10年間で7.9ポイント増加した。また5歳児でも、05年7.6%、10年12.4%、15年14.4%と10年間で6.8ポイント増加した。

「親子でたくさんふれあうこと」「基本的生活習慣を身につけること」は、2歳児以上では5年間であまり変化がないが、0歳児、1歳児では増加傾向がみられる。「数や文字を学ぶこと」も0歳児で増加傾向がみられたことから、子育てを始める初期の段階で、数や文字の習得、親子のふれあい、基本的生活習慣の確立などに力を入れる母親が増えていることがうかがえる。

表2-2-1 子育てで力を入れていること (子どもの年齢別 経年比較)

		(%)						
		0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	6歳児
友だちと一緒に遊ぶこと	05年	14.3	20.8	23.0	25.7	26.7	27.0	27.8
	10年	14.7	20.3	24.3	26.3	27.3	25.0	26.2
	15年	10.8	15.0	17.1	18.2	19.6	21.5	24.2
数や文字を学ぶこと	05年	2.2	4.1	5.5	7.6	8.8	7.6	12.1
	10年	5.8	7.8	9.4	10.2	13.7	12.4	15.4
	15年	10.1	9.5	10.0	10.4	12.6	14.4	16.7
屋外で遊ぶこと	05年	12.0	22.4	22.4	18.6	17.9	17.2	18.0
	10年	16.5	24.4	27.7	25.8	21.2	20.3	21.9
	15年	10.4	21.2	22.4	22.1	19.1	16.3	19.4
自然とたくさんふれあうこと	05年	22.6	24.5	23.0	22.5	25.1	18.0	15.8
	10年	20.6	29.0	26.7	24.4	24.3	23.3	22.5
	15年	15.4	23.1	19.4	22.1	19.5	18.1	18.2
親子でたくさんふれあうこと	05年	70.4	64.2	51.9	46.4	43.3	33.5	28.5
	10年	65.3	59.4	52.9	43.8	39.9	35.3	29.7
	15年	74.7	65.8	51.2	47.6	38.7	33.9	30.1
基本的生活習慣を身につけること	05年	36.3	41.4	46.1	45.1	53.8	54.6	52.3
	10年	37.6	41.3	41.8	44.9	47.6	49.5	49.5
	15年	40.0	45.8	40.4	43.8	46.4	51.3	49.5

注1) 「とても力を入れている」の%。
 注2) 0歳6か月~6歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
 注3) 15項目のうち6項目を表示。
 注4) 子どもの年齢別のサンプル数は以下のとおりである。

(人)							
	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	6歳児
05年	324	649	730	333	307	322	266
10年	319	538	479	537	561	494	503
15年	268	588	564	594	581	629	614

注5) 0歳6か月~6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。



第3節 子どもの進学に対する期待

母親の子どもに対する高学歴志向はさらに強まり、「高校卒業の母親」も子どもに高学歴を期待するようになってきている。子どもの性別では、男子により高い学歴を望んでいるが、この5年間で女子に「四年制大学卒業まで」を期待する比率が大きく増加した。

母親は、子どもの進学に対してどのような期待をしているのだろうか。また、それはこの20年間でどのように変化しているのだろうか。

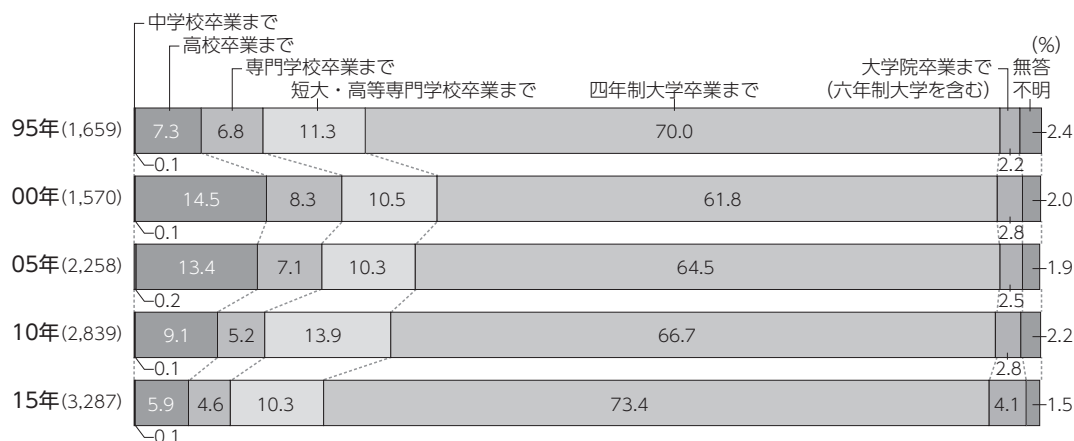
● 73.4%の母親が、子どもに「四年制大学卒業まで」の学歴を期待している

図2-3-1は、母親が子どもをどの学校段階まで進学させたいと思っているかについて、経年比較を行ったものである。これをみると、95年から00年は、「高校卒業まで」の比率が増加し（95年7.3%→00年14.5%、以下同）、「四年制大学卒業まで」の比率が減少したが（70.0%→61.8%）、00年から15年までは一貫して「高校卒業まで」の比率が減少し（14.5%→13.4%→9.1%→5.9%）、「四年制大学卒業まで」の比率が増加している（61.8%→64.5%→66.7%→73.4%）。とくに、10年から15年にかけては、「四年制大学卒業まで」を選択する比率が6.7ポイント増加しており、母親の子どもに対する高学歴志向は強まっているといえよう。

● 母親が女子に「四年制大学卒業まで」を期待する比率が5年間で約10ポイント増加

次に、進学に対する期待が、子どもの性別によってどのように異なるかをみてみよう。図2-3-2をみると、女子に対して「短大・高等専門学校卒業まで」を望む比率は15年では17.8%となり、10年の23.8%から6.0ポイント減少した。一方で、女子に「四年制大学卒業まで」を期待する比率は、00年50.1%→05年52.0%→10年56.8%→15年66.9%となり、00年以降一貫して上昇している。男子についても00年以降、「四年制大学卒業まで」を期待する比率は高くなっており、00年73.0%→05年76.5%→10年76.1%→15年79.7%であった。母親は、依然として男子により高い学歴を期待している。しかし、女子に高学歴を期待する比率が調査をするたびに高くなっているため、性差は徐々に縮まっている。四年制大学卒業以上の学歴を望む比率の性差（男子-女子）については、95年調査から、27.5ポイント差→25.4ポイント差→26.1ポイント差→21.3ポイント差→16.5ポイント差と減少している。

図2-3-1 子どもの進学に対する期待（経年比較）



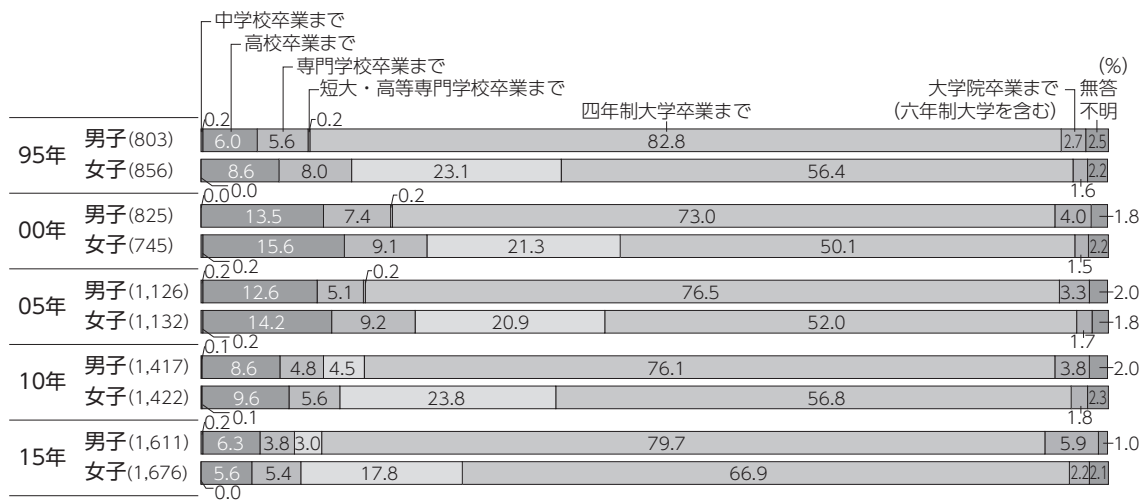
注1) 母親の回答のみ分析。
 注2) 95年、00年、05年調査では、「短大・高等専門学校卒業まで」は「短大卒業まで」、「四年制大学卒業まで」は「大学卒業まで」、「大学院卒業まで（六制大学を含む）」は「大学院卒業まで」とたずねた。
 注3) ()内はサンプル数。

● 「高校卒業の母親」も、子どもに高い学歴を期待するようになっている

次に、子どもの進学に対する期待が、母親の学歴によってどのように異なるかをみてみよう(図2-3-3)。「高校卒業までの母親」(「中学校」「高等学校」「専門学校」を卒業した人)と「大学卒業の母親」(「高等専門学校」「短期大学」「四年制大学」「大学院(六年制大学を含む)」を卒業した人)とを比較すると、95年から15年まで一貫して、「高校卒業の母親」は「大学卒業の母親」と比較して、子どもに「高校卒業まで」「専門学校卒業まで」の学歴を望む比率が高く、四年制大学卒業以上の学歴を望む比率が低い。

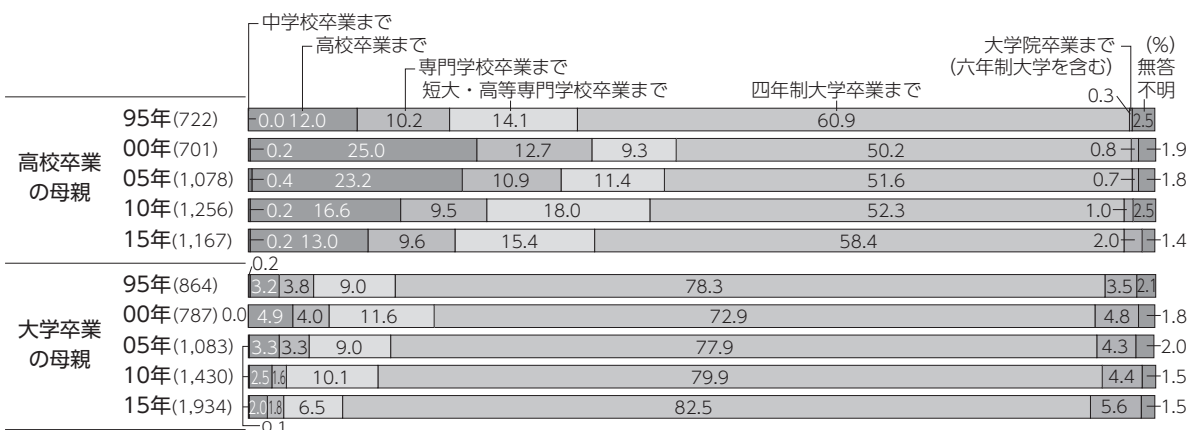
四年制大学卒業以上の学歴を望む比率の差(「大学卒業の母親」-「高校卒業の母親」)は、95年から10年までは、20.6ポイント差→26.7ポイント差→29.9ポイント差→31.0ポイント差と、10年まではやや拡大傾向にあった。しかし15年にはその差が27.7ポイントになり、5年前の調査よりも縮まった。子どもに四年制大学卒業以上の学歴を望む「大学卒業の母親」は10年84.3%→15年88.1%と3.8ポイント増加したのに対して、「高校卒業の母親」では10年53.3%→15年60.4%と7.1ポイント増加した。「高校卒業の母親」も徐々に、子どもに高い学歴を期待するようになっているといえよう。

図2-3-2 子どもの進学に対する期待(性別 経年比較)



注1) 母親の回答のみ分析。
 注2) 95年、00年、05年調査では、「短大・高等専門学校卒業まで」は「短大卒業まで」、「四年制大学卒業まで」は「大学卒業まで」、「大学院卒業まで(六年制大学を含む)」は「大学院卒業まで」とたずねた。
 注3) ()内はサンプル数。

図2-3-3 子どもの進学に対する期待(母親の学歴別 経年比較)



注1) 母親の回答のみ分析。
 注2) 95年、00年、05年調査では、「短大・高等専門学校卒業まで」は「短大卒業まで」、「四年制大学卒業まで」は「大学卒業まで」、「大学院卒業まで(六年制大学を含む)」は「大学院卒業まで」とたずねた。
 注3) 高校卒業の母親は、「中学校」「高等学校」「専門学校」を卒業した人、大学卒業の母親は、「高等専門学校」「短期大学」「四年制大学」「大学院(六年制大学を含む)」を卒業した人を表す。
 注4) ()内はサンプル数。



第4節 教育費

習い事などにかかる費用は、5年間で変化はみられなかったが、幼稚園児、保育園児ともに園にかかる費用で増加傾向がみられた。幼稚園児の園にかかる費用は世帯年収にかかわらず同程度であり、教育費全体への負担感が高かった。

●習い事などにかかる費用は、この5年間で変化はみられない

子ども1人で1か月あたりにかかる教育費はどれくらいか。「塾・通信教育・習い事・絵本・玩具等にかかる費用（幼稚園・保育園で有料で習っているものは除く）」と「幼稚園・保育園にかかる費用（保育料や、幼稚園・保育園で有料で習っている習い事の費用を含む）」についてたずねた。（なお、質問文は、調査回によって、若干の変更を行っている。詳細は図2-4-1の注3を参照）。

図2-4-1をみると、習い事などにかかる教育費は「1,000円～5,000円未満」と「5,000円～10,000円未満」の層が大半を占める。この層の比率は、95年が55.0%、00年が55.5%、05年が55.9%、10年が55.3%、15年が53.3%とあまり変化がなかった。一方、「1,000円未満」は、95年が11.3%、00年が18.6%、05年が11.7%、10年が23.3%、15年が24.4%だった。05年から10年にかけて倍増しており、15年はほぼ横ばいとなった。また、10,000円以上は、95年が31.1%、00年が24.7%、05年が31.1%、10年が17.6%、15年が18.2%だった。05年から10年にかけて13.5ポイント

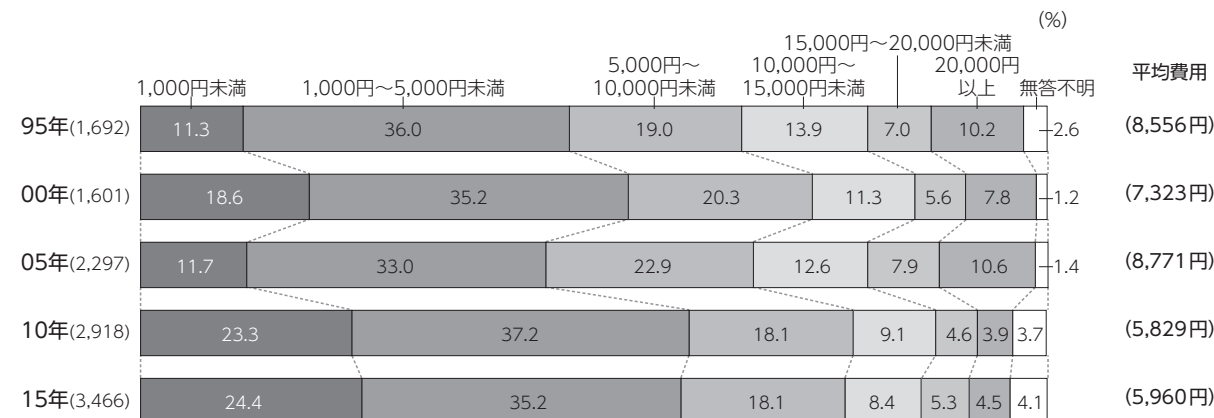
減少し、15年はほぼ横ばいとなった。05年から10年にかけて習い事などにかかる教育費は大きく減少傾向になり、15年はそのまま横ばいの状態だった。

「1,000円未満」を500円、「1,000円～5,000円未満」を3,000円のように置き換えて平均を算出すると、05年が8,771円相当だったのが、10年には5,829円相当と3,000円近く減少し、15年では5,960円相当と、10年とあまり変わらなかった。

●子どもの年齢が上がるにつれて、習い事などにかかる費用は増加

15年で、子どもの年齢別に習い事などにかかる教育費をみた。1歳後半児では、「1,000円未満」が39.3%、「1,000円～5,000円未満」が43.2%であり、これらを合わせて約83%を占めた。平均費用は3,308円相当だった。6歳児になると「1,000円未満」が10.9%、「1,000円～5,000円未満」が24.7%であり、これらを合わせて約36%であり、平均費用は9,235円相当だった。習い事などにかかる教育費は、子どもの年齢と大きく関係しており、10年調査の傾向と変わらなかった（図示省略）。

図2-4-1 ひとりあたりの教育費（経年比較）



注1) 平均費用は「1,000円未満」を500円、「1,000円～5,000円未満」を3,000円、「30,000円以上」を32,500円のように置き換えて算出した。無答不明の人は分析から除外している。

注2) 「20,000円～25,000円未満」「25,000円～30,000円未満」「30,000円以上」を「20,000円以上」としている。

注3) 95年、00年、05年調査は「幼稚園・保育園にかかる費用（就園補助等も含めて）」を除いた、1か月あたりの塾・通信教育・習い事・絵本・玩具等にかかる費用を教えてください。とたずねている。（ただし、95年は、質問文に「(就園補助等も含めて)」と「絵本・玩具」の部分は含まない）

注4) ()内はサンプル数。

●高年齢で保育園児の習い事にかかる教育費が増加傾向

子どもの就園状況により、習い事などの教育費に違いはあるか。図2-4-2をみると、15年調査では、低年齢で未就園児と保育園児で差はみられなかった。一方、高年齢で幼稚園児と保育園児に差がみられた。「1,000円未満」と「1,000円～5,000円未満」を合わせた比率は、幼稚園児が43.8%、保育園児が52.6%であり、平均費用は幼稚園児が7,848円相当で、保育園児が6,777円相当だった。

10年と15年での平均費用の変化をみると、低年齢ではあまり変化はみられなかった。一方、高年齢では幼稚園児の費用はほぼ変化は見られなかったが、保育園児の費用がやや高くなり、平均費用を比べると10年が6,009円相当、15年が6,777円相当だった。高年齢の保育園児で習い事をしている比率が増加傾向にあることと関連すると思われる。

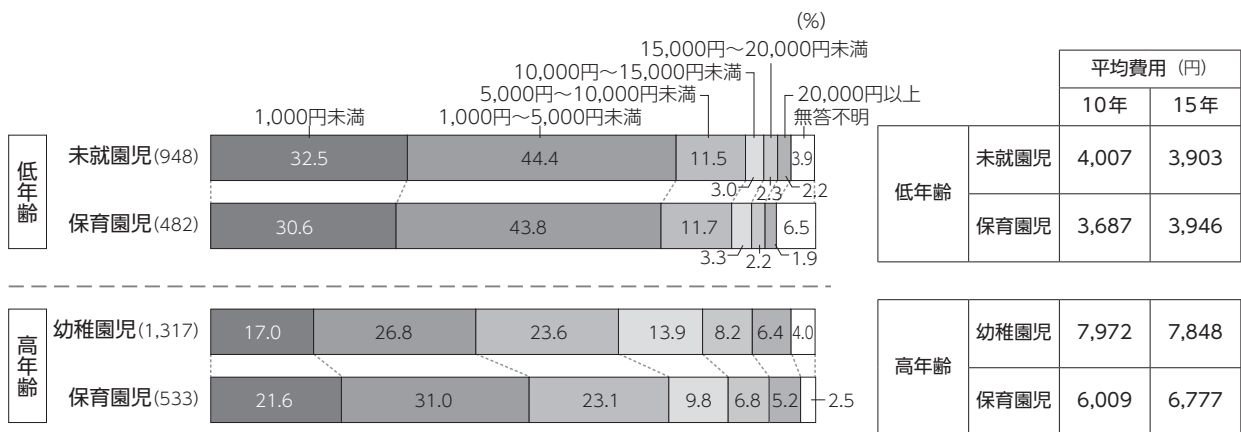
●高年齢で、幼稚園児、保育園児ともに園にかかる費用が増加

幼稚園や保育園にかかる費用をみよう。保育園について、低年齢と高年齢で比較した。

図2-4-3をみると、低年齢でもっとも多かったのは、「50,000円以上」で29.4%だった。平均費用は35,866円相当だった。高年齢でもっとも多かったのは「20,000円～30,000円未満」で39.8%だった。平均費用は25,100円相当であり、低年齢に比べて10,000円ほど差があった。

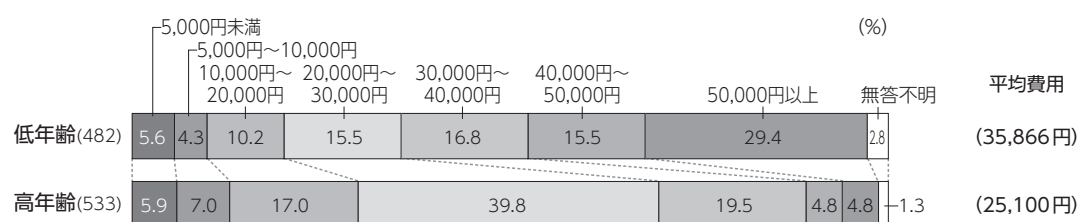
次に、高年齢において、15年での幼稚園と保育園で比較しよう。図2-4-4をみると、幼稚園児で多くを占めたのが、「20,000円～30,000円未満」が31.7%、「30,000円～40,000円未満」が45.7%で、合わせて約77%だった。また、平均費用は30,925円相当だった。一方、保育園児の場合、「20,000円～30,000円未満」が39.8%だったが、幼稚園に比べると費用のばらつきが大きかった。平均費用は25,100円相当だった。

図2-4-2 ひとりあたりの教育費 (子どもの年齢区分別・就園状況別 15年)



注1) 平均費用は「1,000円未満」を500円、「1,000円～5,000円未満」を3,000円、「30,000円以上」を32,500円のように置き換えて算出した。無答不明の人は分析から除外している。
 注2) 「20,000円～25,000円未満」「25,000円～30,000円未満」「30,000円以上」を「20,000円以上」としている。
 注3) 調査時点における子どもの年齢区分は以下のとおりである。
 低年齢：1歳6か月～3歳11か月の幼児。 高年齢：4歳0か月～6歳11か月の幼児。
 注4) ()内はサンプル数。

図2-4-3 保育園にかかる費用 (子どもの年齢区分別 15年)



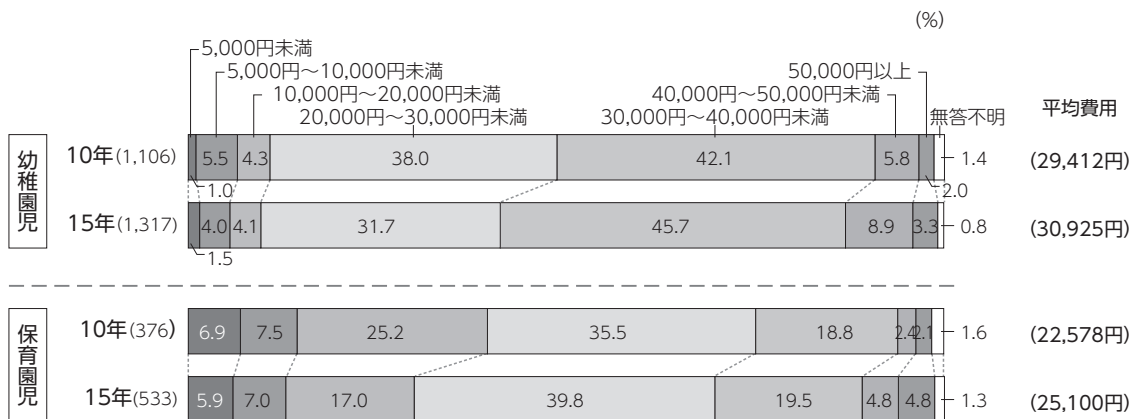
注1) 子どもを保育園に通わせている人のみ回答。
 注2) 平均費用は「5,000円未満」を2,500円、「5,000円～10,000円未満」を7,500円、「50,000円以上」を55,000円のように置き換えて算出した。無答不明の人は分析から除外している。
 注3) 調査時点における子どもの年齢区分は以下のとおりである。
 低年齢：1歳6か月～3歳11か月の幼児。 高年齢：4歳0か月～6歳11か月の幼児。
 注4) ()内はサンプル数。

高年齢での園にかかる費用を10年と15年での変化をみると、30,000円以上の比率は、幼稚園児で10年調査の49.9%から15年調査の57.9%、保育園児で10年調査の23.3%から15年調査の29.1%と増加した。平均費用は、幼稚園児では10年調査が29,412円相当、15年調査が30,925円相当と1,500円ほど高くなっていった。また保育園児では10年調査が22,578円、15年調査が25,100円と2,500円ほど高くなっていった。幼稚園児、保育園児ともに園にかかる費用は増加の傾向がみられた。

●習い事などの教育費は、世帯年収と関連性がみられる。幼稚園児の園にかかる費用は、世帯年収にかかわらず同程度

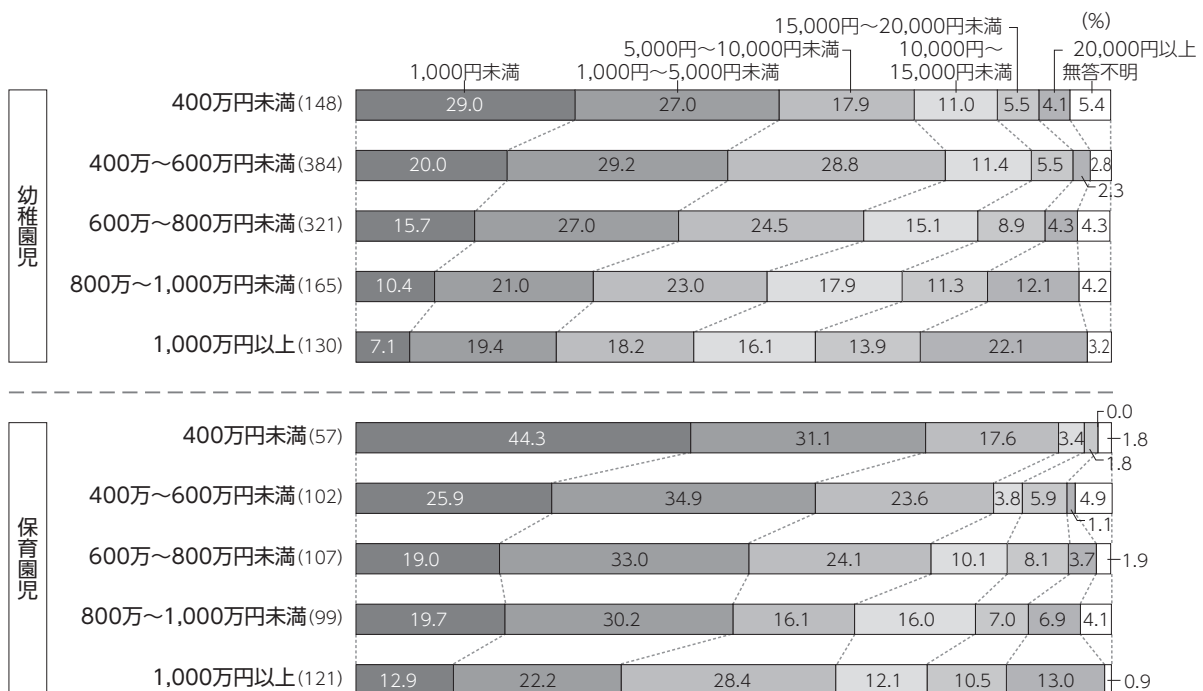
子育てや教育にかかる費用を家計からどれくらい支出するかは、家族にとって大きな問題である。そこで、習い事などの教育費・幼稚園や保育園にかかる費用と世帯年収との関係について分析した。ここでは、幼稚園や保育園に就園している比率の高い高年齢についてみていきたい。

図2-4-4 園にかかる費用(就園状況別(高年齢)経年比較)



注1) 子どもを園に通わせている人のみ回答。
 注2) 高年齢は、4歳~6歳11か月の幼児。
 注3) 平均費用は「5,000円未満」を2,500円、「5,000円~10,000円未満」を7,500円、「50,000円以上」を55,000円のように置き換えて算出した。無答不明の人は分析から除外している。
 注4) ()内はサンプル数。

図2-4-5 ひとりあたりの教育費(就園状況別(高年齢)世帯年収別 15年)



注1) 高年齢は、4歳~6歳11か月の幼児。
 注2) 「20,000円~25,000円未満」「25,000円~30,000円未満」「30,000円以上」を「20,000円以上」としている。
 注3) 平均費用は「1,000円未満」を500円、「1,000円~5,000円未満」を3,000円、「30,000円以上」を32,500円のように置き換えて算出した。無答不明の人は分析から除外している。
 注4) ()内はサンプル数。

図2-4-5は習い事などの教育費を就園状況別に世帯年収でみたものである。これをみると、就園状況にかかわらず、世帯年収が高いほど、習い事などの教育費を多く支出していることがわかる。

次に、図2-4-6は園にかかる費用を就園状況別に世帯年収でみたものである。これをみると、保育園児の場合、世帯年収が上がるほど園にかかる費用を多く支出していることがわかる。一方、幼稚園児の場合、世帯年収にかかわらず、園にかかる費用が同程度だった。

●教育費の負担感は経年で変わらない。保育園児の負担感は年齢で変わらないが、幼稚園児の負担感が高い

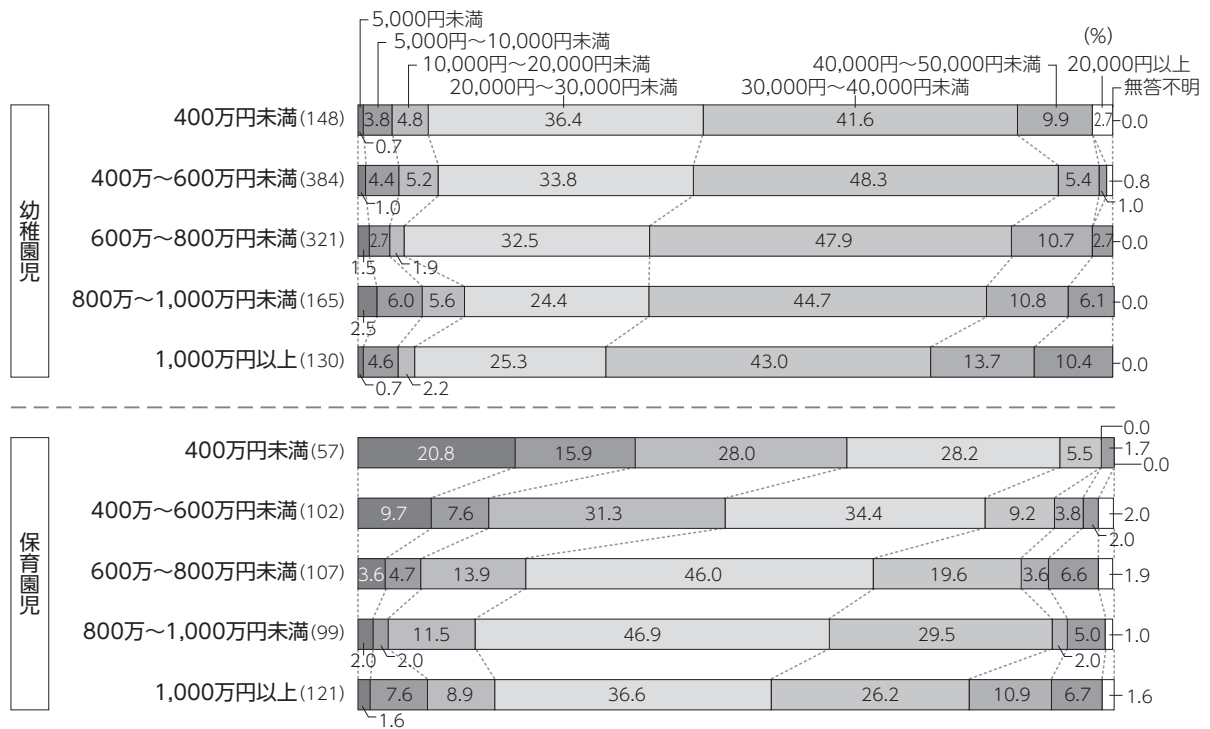
ここまで、習い事や園などの教育費の状況についてみ

てきた。では教育費の支出について保護者はどのように感じているだろうか。ここでは母親の回答のみ分析する。

教育費の負担感について、10年調査と15年調査を比べたのが図2-4-7である。これをみると教育費の負担感に変化はみられなかった。15年では、負担を「とても感じる」が11.6%、「まあ感じる」が42.1%であり、合わせて53.7%と約半数だった。約半数の母親が負担感を感じているといえよう。

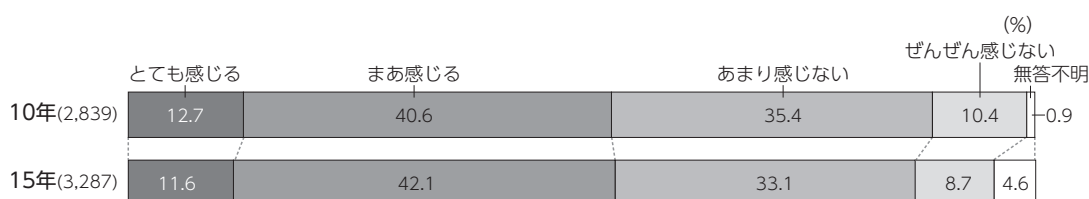
次に、低年齢と高年齢に分けて就園状況別にみた(図示省略)。負担を「感じる(とても+まあ)」比率は、低年齢の場合では未就園児で34.2%、保育園児で47.2%、高年齢の幼稚園児で72.5%、保育園児で48.9%だった。保育園児の場合、低年齢と高年齢であまり負担感が変わらない。一方、高年齢の幼稚園児で負担感が7割以上と高い比率だった。

図2-4-6 園にかかる費用(就園状況別(高年齢) 世帯年収別 15年)



注1) 子どもを園に通わせている人のみ回答。
 注2) 高年齢は、4歳～6歳11か月の幼児。
 注3) 平均費用は「5,000円未満」を2,500円、「50,000円以上」を55,000円のように置き換えて算出した。無答不明の人は分析から除外している。
 注4) ()内はサンプル数。

図2-4-7 教育費の負担感(経年比較)



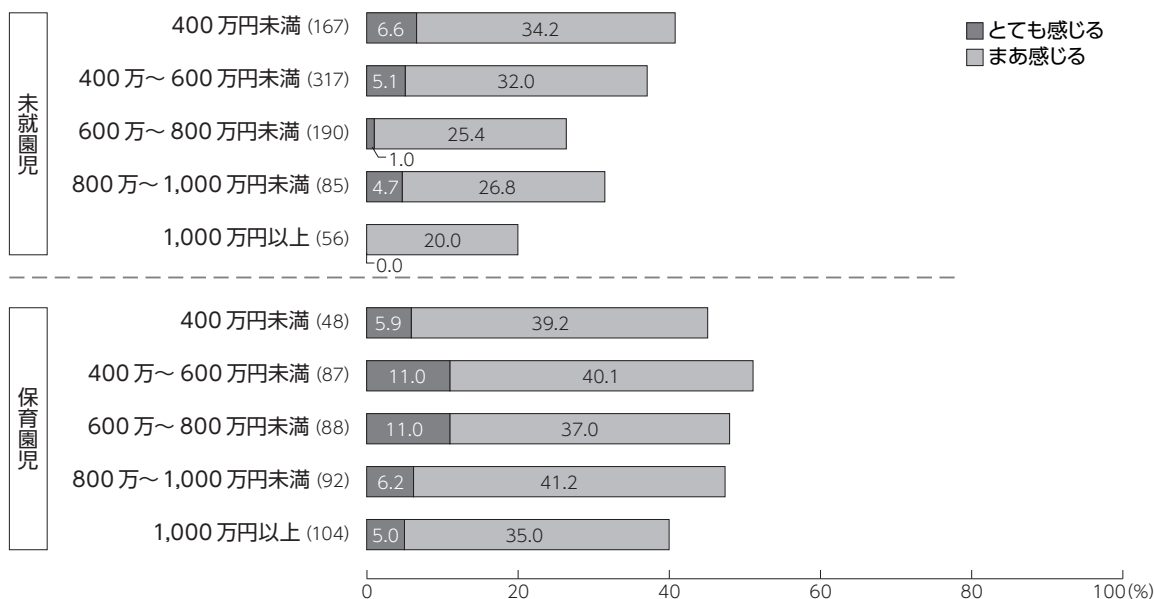
注1) 母親の回答のみ分析。
 注2) ()内はサンプル数。

さらに、低年齢と高年齢で就園状況別に教育費の負担感をみたのが、図2-4-8、9である。図2-4-8をみると、低年齢の未就園児で負担を「感じる(とても+まあ)」比率は、世帯年収別での傾向がみられなかった。一方、高年齢をみる(図2-4-9)と、負担を「感じる(とても+まあ)」比率は、保育園児の場合、世帯年収が「400万円未満」で55.2%、「400万~600万円未満」で57.4%、「600万~800万円未満」で54.3%、「800万~1,000万円未満」で51.5%、「1,000万円以上」で37.4%であり、800万円未満では大きな差が見られな

かった。一方、幼稚園児の場合、世帯年収が「400万円未満」で83.7%、「400万~600万円未満」で78.4%、「600万~800万円未満」で71.7%、「800万~1,000万円未満」で68.4%、「1,000万円以上」で55.7%であり、比較的差がみられた。

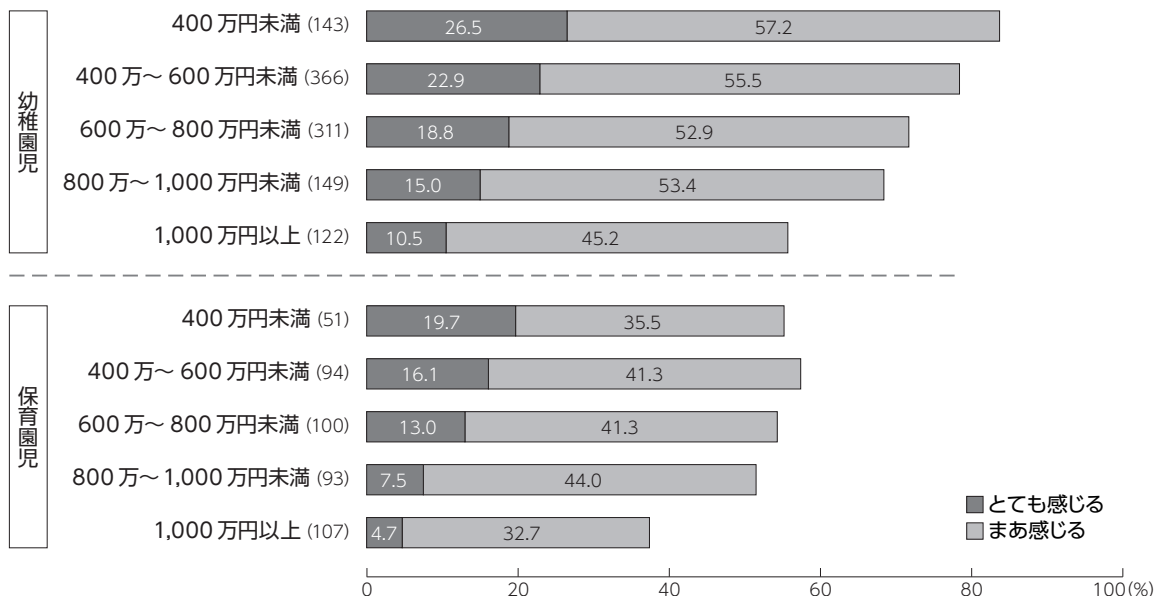
高年齢の幼稚園児の場合、園にかかる費用が世帯年収にかかわらず同程度であり、さらに習い事をしている比率が高かった。このことが負担感につながっているのではないだろうか。

図2-4-8 教育費の負担感(就園状況別(低年齢) 世帯年収別 15年)



注1) 母親の回答のみ分析。
 注2) 低年齢は、1歳6か月~3歳11か月の幼児。
 注3) ()内はサンプル数。

図2-4-9 教育費の負担感(就園状況別(高年齢) 世帯年収別 15年)



注1) 母親の回答のみ分析。
 注2) 高年齢は、4歳0か月~6歳11か月の幼児。
 注3) ()内はサンプル数。



第5節 母親の子育て意識

15年前と比較して、子育てへの肯定的感情が高い傾向に変化はない。しかし、子育てにおける将来への不安は高まっている。また、専業主婦における育児への否定的感情が再び高まりつつある傾向がある。

●子育てへの肯定的感情は高いが、子どもの育ちへの不安が高まっている

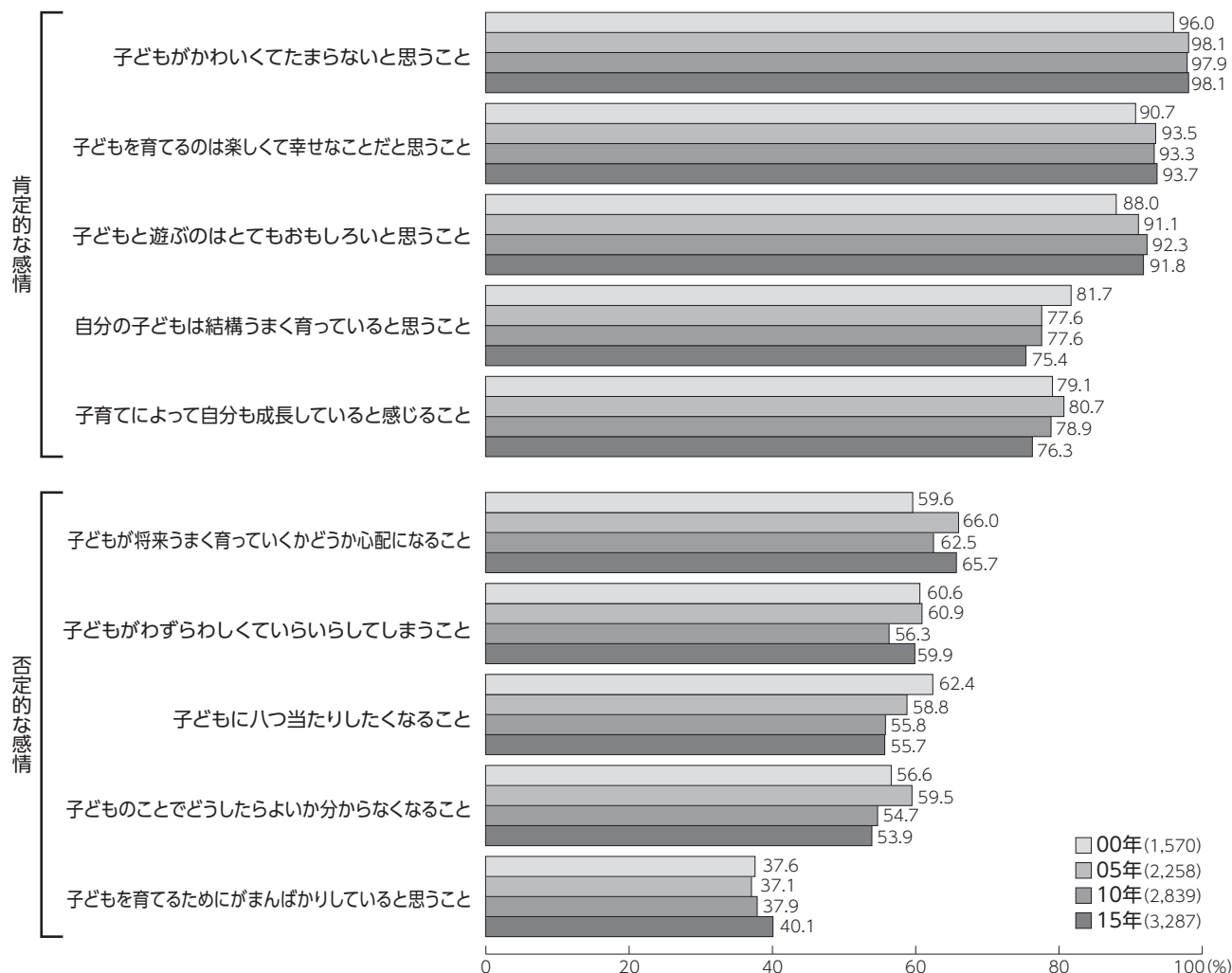
図2-5-1は、母親の子育て意識に関して、00年からの15年間に於ける推移を表したものである。

図の上位5項目は、子育てへの肯定的な感情であり、いずれも「よくある」あるいは「ときどきある」と答えている比率が高いが、「自分の子どもは結構うまく育っ

ていると思うこと」については、15年前と比較して5ポイントほど減少しており、子どもの発達に関する不安は若干高まっていることがわかる。

また、下位5項目は子育てへの否定的感情に関する項目であるが、「子どもが将来うまく育っていくかどうか心配になること」については15年前より5ポイント以上の増加傾向にあり、やはり子どもの発達への不安がうかがえる結果となっている。

図2-5-1 母親の子育て意識（経年比較）



注1) 「よくある+ときどきある」の%。
 注2) 母親の回答のみ分析。
 注3) ()内はサンプル数。

●**専業主婦において、育児への否定的感情が高まっている**

図2-5-2は、子育て意識について、母親の就業状況別に、05年から15年までの10年間の経年比較をした結果を表したものである。

10年調査では、専業主婦では育児への否定的感情に関する数値が減少しつつある一方で、常勤者やパートタイムでは高まっている傾向がみられた。しかし今回の調査では、専業主婦では、否定的感情に関する5項目すべてにおいて、増加傾向にあり、05年の水準かそれ以上に回帰している。

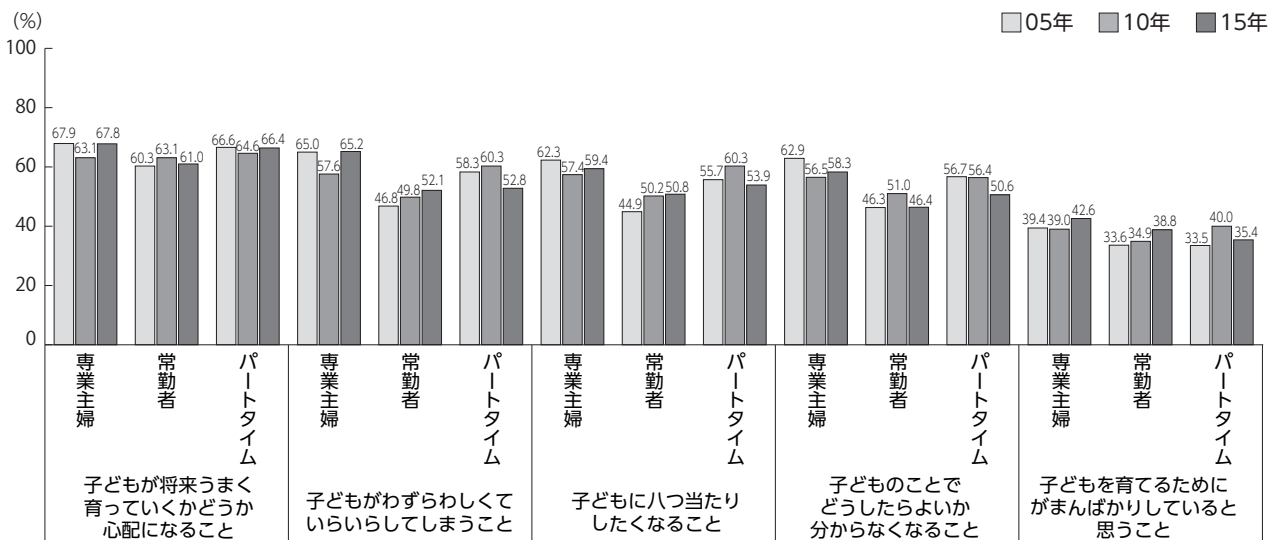
常勤者において変化があったのは、「子どもがわずら

わしくていららしてしまうこと」、「子どもに八つ当たりしたくなること」、「子どもを育てるためにがまんばかりしていると思うこと」といった、とくに育児への負担感に関する項目において数値の増加が認められた。これと対照的に、パートタイムではこうした項目において減少傾向がみられた。

●**子どもが低年齢である場合には、未就園児をもつ母親のほうが育児への否定的感情が強い傾向にある**

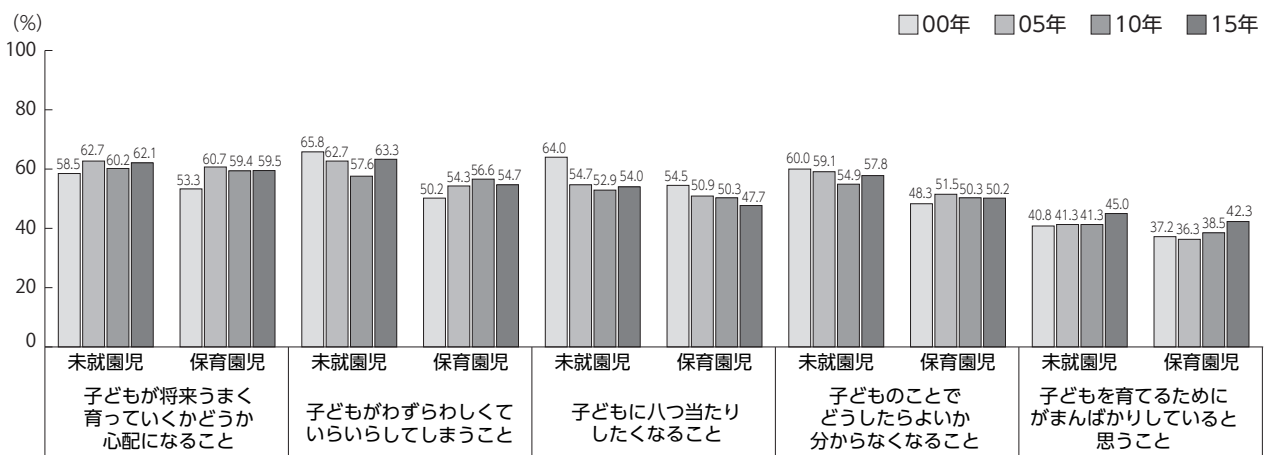
つづいて、図2-5-3、4では、育児への否定的感情について、子どもの年齢による就園状況における違い

図2-5-2 母親の子育て意識 (母親の就業状況別 経年比較)



注1) 「よくある+ときどきある」の%。
 注2) 母親の回答のみ分析。
 注3) 10項目のうち、否定的感情を表す5項目を図示。
 注4) サンプル数は05年(専業主婦1,578人、常勤者213人、パートタイム253人)、10年(専業主婦1,608人、常勤者405人、パートタイム465人)、15年(専業主婦1,701人、常勤者639人、パートタイム556人)。

図2-5-3 母親の子育て意識 (就園状況別 (低年齢) 経年比較)



注1) 「よくある+ときどきある」の%。
 注2) 母親の回答のみ分析。
 注3) 10項目のうち、否定的感情を表す5項目を図示。
 注4) 子どもの年齢は、1歳6か月～3歳11か月。
 注5) サンプル数は00年(未就園児718人、保育園児116人)、05年(未就園児1,100人、保育園児209人)、10年(未就園児850人、保育園児291人)、15年(未就園児920人、保育園児452人)。

に焦点をあて、00年から15年までの15年間の推移をまとめている。

図2-5-3は、1歳6か月から3歳11か月までの低年齢児に絞って、未就園児か保育園児かにおいて比較した結果である。

就園状況によって差のない項目は、「子どもが将来うまく育っていくかどうか心配になること」と「子どもを育てるためにがまんばかりしていると思うこと」の2項目であり、いずれも若干増加傾向にある。

また、未就園児群において変化があったのは、「子どもがわずらわしくていららしてしまうこと」であり、10年調査より5ポイント以上増加している。この項目に関して、保育園児群では、少し減少傾向にある。

全般的に、未就園児をもつ母親のほうが否定的感情は強く、これまでと同様、こうした家庭への支援が必要であるといえる。

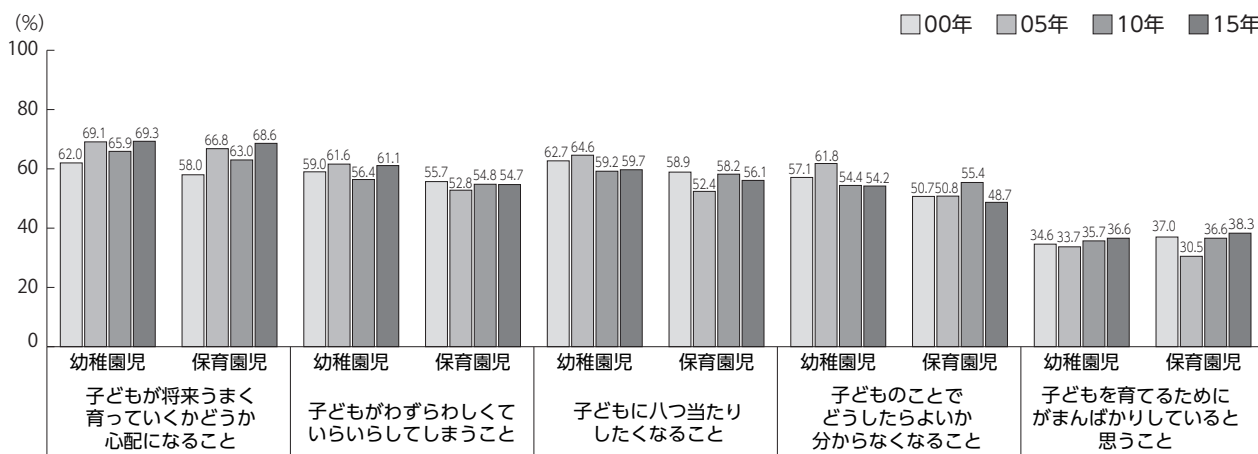
●今、現状での子育ての是非よりも、将来への不安が高まっている

つづいて、図2-5-4では、4歳以上の高年齢児をもつ母親の否定的感情について、就園状況別による比較結果を表している。

ここでも全体的な傾向と同じく、幼稚園児群、保育園児群ともに「子どもが将来うまく育っていくかどうか心配になる」という項目において増加傾向がみられた。

一方で、減少傾向にあったのは、「子どものことでどうしたらよいかわからなくなること」であり、とくに保育園児群では5ポイント以上減っていた。このことから、今この場において、子育てで迷うというよりも、将来のことを見据えた場合、このままでよいのだろうか、といった漠然とした不安にかられる母親が増えているといった状況がうかがえる。

図2-5-4 母親の子育て意識（就園状況別（高年齢） 経年比較）



注1) 「よくある+ときどきある」の%。

注2) 母親の回答のみ分析。

注3) 10項目のうち、否定的感情を表す5項目を図示。

注4) 子どもの年齢は、4歳0か月～6歳11か月。

注5) サンプル数は00年（幼稚園児494人、保育園児120人）、05年（幼稚園児667人、保育園児151人）、10年（幼稚園児1,094人、保育園児355人）、15年（幼稚園児1,253人、保育園児489人）。



第6節 しつけや教育の情報源

しつけや教育の情報源では、「母親の友人・知人」、「インターネットやブログ」の比率が高い。20代の母親は、祖父母とネットでの情報に頼る傾向がみられた。

●しつけや教育の情報源では、「母親の友人・知人」、「インターネットやブログ」の比率が高い

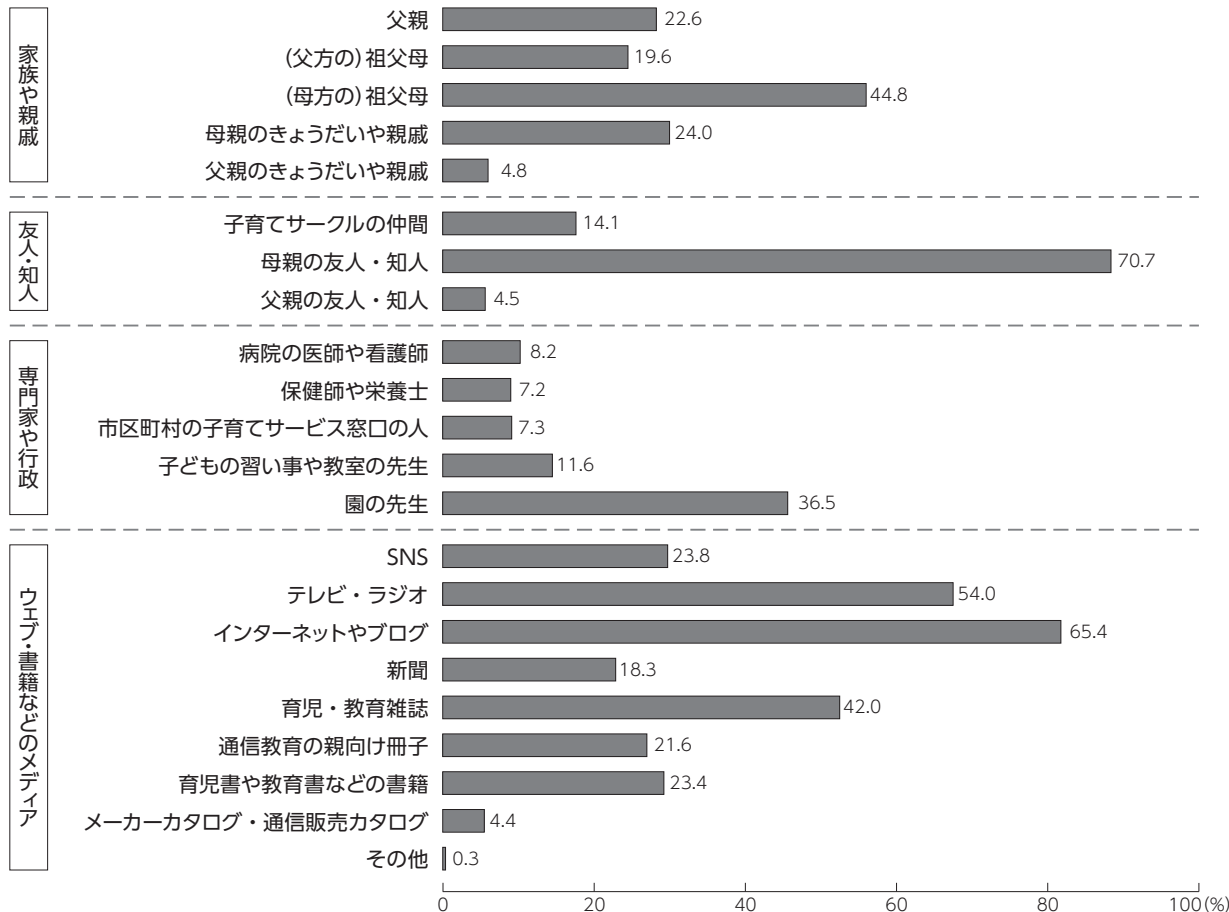
幼児をもつ母親は、子どものしつけや教育の情報をどのように得ているだろうか。調査では「現在、あなたは『お子様のしつけや教育』についての情報をどこから（誰から）得ていますか」と複数回答でたずねた。図2-6-1をみると、しつけや教育の情報源として、多い順に「母親の友人・知人」が70.7%、「インターネットやブログ」が65.4%、「テレビ・ラジオ」が54.0%、「(母方の) 祖父母」が44.8%、「育児・教育雑誌」が42.0%だった。種類別にみると、1位の「母親の友人・知人」は友人・

知人、2位の「インターネットやブログ」、3位の「テレビ・ラジオ」と5位の「育児・教育雑誌」はウェブ・書籍などのメディア、4位の「(母方の) 祖父母」は家族や親戚など、母親は多方面から情報を得ていた。

●0歳6か月～1歳5か月では、多岐にわたって情報を得ている

子どもの年齢により、情報源は異なってくるだろうか。未就園児で0歳6か月～1歳5か月の時点と、1歳6か月～3歳11か月の時点とを比べた。表2-6-1で下線を引いたところが5ポイント以上差の見られたところである。

図2-6-1 しつけや教育の情報源 (15年)



注1) 複数回答。

注2) 0歳6か月～6歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。

注3) 母親のみ分析 (3,838人)。そのため、「(お子様の) 母親」の項目を省略。

注4) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

まず、「(母方の) 祖父母」について、0歳6か月～1歳5か月では54.5%だったのに対して、1歳6か月～3歳11か月では49.3%と5.2ポイント減った。また、専門家や行政では、「病院の医師や看護師」「保健師や栄養士」「市区町村の子育てサービス窓口の人」が減った。ウェブ・書籍などのメディアでは「SNS」「インターネットやブログ」「育児・教育雑誌」「育児書や教育所などの書籍」「メーカーカタログ・通信販売カタログ」が減った。0歳6か月～1歳5か月の時期、多岐にわたる情報源からしつけや教育の情報を得ていることがわかる。一方、子どもの年齢が上がると増えるのが、「子どもの習い事や教室の先生」「新聞」「通信教育の親向け冊子」だった。子どもの成長に伴い、習い事や教育関連で情報源が増えている様子うかがえる。

● 1歳6か月～3歳11か月では、未就園児の母親は多くの人から、保育園児の母親は「園の先生」から情報を得ている

子どもの就園状況で、情報源に差はあるだろうか。1歳6か月～3歳11か月では未就園児と保育園児を、4歳

0か月～6歳11か月では幼稚園児と保育園児を比べた(表2-6-1)。

1歳6か月～3歳11か月で未就園児のほうが保育園児より5ポイント以上高かったのは、「子育てサークルの仲間」(未就園児24.4%、保育園児6.4%、差18.0ポイント)、「市区町村の子育てサービス窓口の人」(未就園児11.9%、保育園児4.1%、差7.8ポイント)、「子どもの習い事や教室の先生」(未就園児11.7%、保育園児3.9%、差7.8ポイント)、「(父方の) 祖父母」(未就園児23.5%、保育園児16.2%、差7.3ポイント)「父親」(未就園児23.6%、保育園児17.8%、差5.8ポイント)、「(母方の) 祖父母」(未就園児49.3%、保育園児43.7%、差5.6ポイント)だった。保育園児のほうが未就園児より高かったのは、「園の先生」(未就園児9.2%、保育園児75.9%、差66.7ポイント)だった。1歳6か月～3歳11か月の場合、未就園児の母親のほうが多くの人から情報を得ていた。また、保育園児の母親は子どものしつけや教育について、園の先生を頼りにしている様子うかがえる。

表2-6-1 しつけや教育の情報源 (子どもの年齢区分別・就園状況別 15年)

(%)

	0歳6か月～1歳5か月	1歳6か月～3歳11か月		4歳0か月～6歳11か月	
	未就園児 (493)	未就園児 (920)	保育園児 (452)	幼稚園児 (1253)	保育園児 (489)
父親	21.3	23.6	17.8	23.2	23.9
(父方の) 祖父母	24.9	23.5	16.2	16.8	17.8
(母方の) 祖父母	54.5	49.3	43.7	38.8	40.2
母親のきょうだいや親戚	25.2	25.3	25.5	22.6	21.8
父親のきょうだいや親戚	6.7	5.7	4.8	4.0	3.6
子育てサークルの仲間	24.8	24.4	6.4	8.2	4.1
母親の友人・知人	64.2	65.4	65.7	80.6	68.8
父親の友人・知人	8.7	3.9	3.0	3.8	4.3
病院の医師や看護師	14.2	8.8	11.9	3.7	6.6
保健師や栄養士	18.7	9.0	5.3	2.7	3.5
市区町村の子育てサービス窓口の人	18.5	11.9	4.1	2.7	2.3
子どもの習い事や教室の先生	4.7	11.7	3.9	17.7	10.0
園の先生	4.8	9.2	75.9	43.4	65.6
SNS	33.2	24.6	23.2	18.7	24.2
テレビ・ラジオ	50.3	54.7	51.1	59.1	47.7
インターネットやブログ	78.4	69.0	69.1	58.7	58.0
新聞	10.2	15.7	16.6	23.2	19.4
育児・教育雑誌	65.0	41.9	44.4	35.4	34.4
通信教育の親向け冊子	17.4	22.4	18.1	23.9	23.3
育児書や教育書などの書籍	33.3	23.9	21.5	20.7	19.4
メーカーカタログ・通信販売カタログ	9.4	4.4	4.5	2.9	3.1
その他	0.2	0.0	0.7	0.2	0.6

注1) 複数回答。

注2) 0歳6か月～6歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。

注3) 母親のみ分析。そのため、「(お子様の) 母親」の項目を省略。()内はサンプル数。

注4) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

注5) 下線は、0歳6か月～1歳5か月の未就園児と、1歳6か月～3歳11か月の未就園児で5ポイント以上差のある項目の大きいもの。

注6) 網かけは、1歳6か月～3歳11か月では未就園児と保育園児、4歳～6歳11か月では幼稚園児と保育園児で5ポイント以上差のある項目で大きいもの。

●4歳0か月～6歳11か月では、幼稚園児の母親は知人・友人から、保育園児の母親は知人・友人と園の先生から情報を得ている

続いて、4歳0か月～6歳11か月で幼稚園児のほうが保育園児より5ポイント以上高かったのは、「母親の友人・知人」(幼稚園児80.6%、保育園児68.8%、差11.8ポイント)、「テレビ・ラジオ」(幼稚園児59.1%、保育園児47.7%、差11.4ポイント)、「子どもの習い事や教室の先生」(幼稚園児17.7%、保育園児10.0%、差7.7ポイント)だった。保育園児のほうが幼稚園児より高かったのは、「園の先生」(幼稚園児43.4%、保育園児65.6%、差22.2ポイント)、「SNS」(幼稚園児18.7%、保育園児24.2%、差5.5ポイント)だった。4歳0か月～6歳11か月の場合、幼稚園児の母親は「母親の友人・知人」から情報を得ることが多く、保育園児の母親は「母親の友人・知人」と「園の先生」から同じくらい情報を得ているようだ。また、メディアについて幼稚園児の母親は「テレビ・ラジオ」から情報を得ることが多く、保育園児の母親は「SNS」からも情報を得ることが多かった。情報を得る場面として、幼稚園児の母親は在宅でテ

レビやラジオを見る機会が多く、保育園児の母親は外出先でSNSを利用する様子が見える。

●20代の母親は、祖父母とネットから情報を得る傾向

母親の年代区別で情報源に差があるか。子どもが小さいほど母親の年齢も若いいため、年代区別による差をみるために、子どもの年齢を1歳6か月以上に限定してみよう。20代の母親と40代以上の母親を比べて差が10ポイント以上のものをみた(表2-6-2)。20代の母親が情報を得る比率が高かったのは、「(父方の)祖父母」(20代22.4%、40代以上12.3%)、「(母方の)祖父母」(20代61.6%、40代以上32.2%)、「SNS」(20代38.1%、40代以上14.8%)、「インターネットやブログ」(20代71.7%、40代以上56.8%)だった。20代の母親は祖父母とネットから情報を得る傾向がみられた。

一方、40代以上の母親が情報を得る比率が高かったのは、「母親の友人・知人」(20代56.0%、40代以上73.0%)、「園の先生」(20代30.6%、40代以上45.1%)「新聞」(20代4.7%、40代以上26.3%)だった。

表2-6-2 しつけや教育の情報源 (母親の年代区別 15年)

	(%)		
	20代 (219)	30代 (1,864)	40代以上 (826)
(お子様の) 父親	18.9	23.7	21.5
(父方の) 祖父母	22.4	21.4	12.3
(母方の) 祖父母	61.6	46.6	32.2
母親のきょうだいや親戚	21.8	24.4	22.9
父親のきょうだいや親戚	3.7	4.4	4.1
子育てサークルの仲間	15.5	13.5	9.4
母親の友人・知人	56.0	72.4	73.0
父親の友人・知人	4.1	4.0	3.0
病院の医師や看護師	11.2	7.2	6.6
保健師や栄養士	5.2	6.1	3.5
市区町村の子育てサービス窓口の人	6.3	6.1	4.5
子どもの習い事や教室の先生	6.9	12.6	15.7
園の先生	30.6	41.3	45.1
SNS(Facebook, Twitter, LINEなどのソーシャルメディア)	38.1	24.9	14.8
テレビ・ラジオ	52.0	54.8	54.7
インターネットやブログ	71.7	65.4	56.8
新聞	4.7	17.6	26.3
育児・教育雑誌	38.9	39.4	35.1
通信教育の親向け冊子	18.3	22.8	23.1
育児書や教育所などの書籍	16.9	21.5	23.4
メーカーカタログ・通信販売カタログ	2.2	3.8	3.4
その他	0.4	0.3	0.2
無答不明	0.0	0.0	0.0

注1) 複数回答。

注2) 母親のみ分析。そのため、「(お子様の) 母親」の項目を省略。()内はサンプル数。

注3) 網かけは、年代区別で10ポイント以上の差がある項目の最大値。



第7節 幼稚園・保育園への要望

幼稚園・保育園に対する要望をみると、前回までの調査と比較して増加傾向にあるのは「知的教育を増やしてほしい」「保育終了後におけいご事をやってほしい」「子どもが病気のときに預かってほしい」である。

●園に知的教育やおけいご事を求める母親が増加

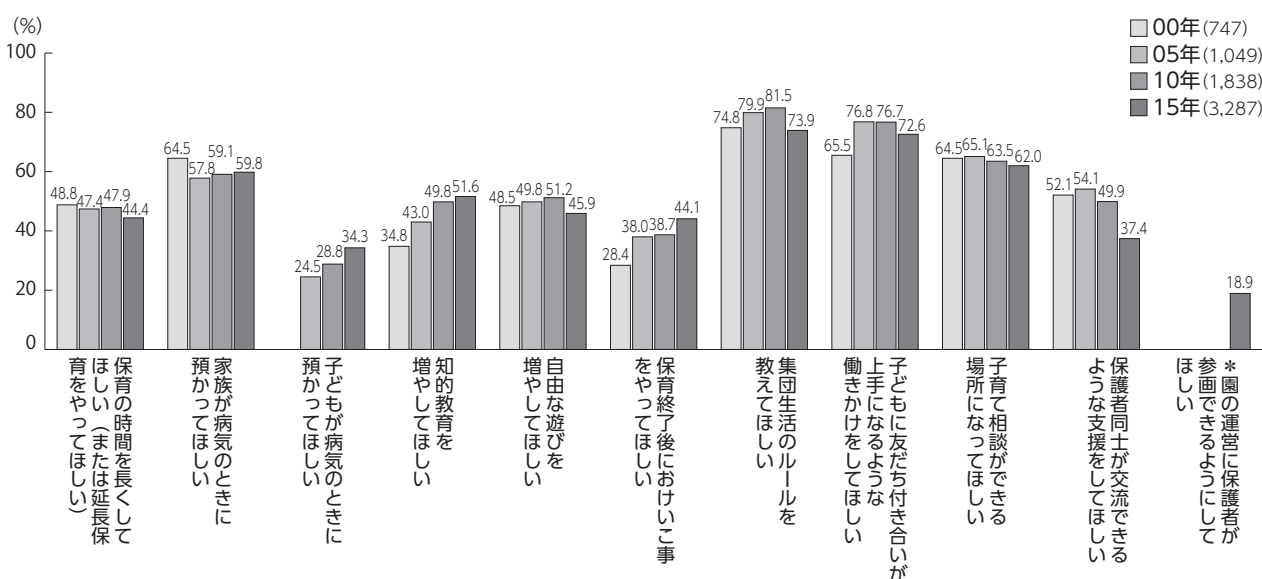
子どもたちが幼稚園や保育園で過ごす時間が増え、幼児の生活の中で、園の存在感はますます大きくなっている。それでは、母親たちは園に何を期待しているのだろうか。本節では、幼稚園・保育園への要望について、母親の回答結果を分析した(図2-7-1)。

上位(「とてもそう思う+まあそう思う」の%)の項目は15年間で大きな変化はない。約7割の母親が園に対して「集団生活のルールを教えてほしい」「子どもに友だち付き合いが上手になるような働きかけをしてほしい」と思っている。次いで、約6割の母親が「子育て相談ができる場所になってほしい」「家族が病気のときに預かってほしい」と思っている。

また、15年前の00年から一貫して増加傾向にある項目は、「知的教育を増やしてほしい」(00年34.8%→05

年43.0%→10年49.8%→15年51.6%。以下同)、「保育終了後におけいご事をやってほしい」(28.4%→38.0%→38.7%→44.1%)である。05年から新たに追加した項目である「子どもが病気のときに預かってほしい」も10年間で増加傾向にある(05年24.5%→10年28.8%→15年34.3%。以下同)。逆に、この10年間で減少傾向にあるのは「保護者同士が交流できるような支援をしてほしい」(54.1%→49.9%→37.4%)であった。また、この5年間で減少したのは「自由な遊びを増やしてほしい」(10年51.2%→15年45.9%。以下同)、「集団生活のルールを教えてほしい」(81.5%→73.9%)であった。全体をみると、園では社会性を身につけてほしいと考える母親が多いものの、遊びや日常の保育だけではなく「知的教育」「おけいご事」もと要望が多様になっていることがうかがえる。また「保護者同士が交流できるような支援をしてほしい」の減少については、すでに

図2-7-1 幼稚園・保育園への要望(経年比較)



注1) 「とてもそう思う+まあそう思う」の%。
 注2) 母親の回答のみ分析。
 注3) 子どもを園に通わせている人のみ回答。
 注4) 「子どもが病気のときに預かってほしい」は00年ではたずねていない。
 注5) *は15年調査のみの項目。
 注6) ()内はサンプル数。

多くの幼稚園・保育園でそうした機会を用意しているために「もう十分である」と考えている母親や、保護者同士の人間関係の難しさから交流を敬遠する母親がいることが背景にあるだろう。

●幼稚園児よりも保育園児、高年齢よりも低年齢の子どもをもつ母親の要望が高い

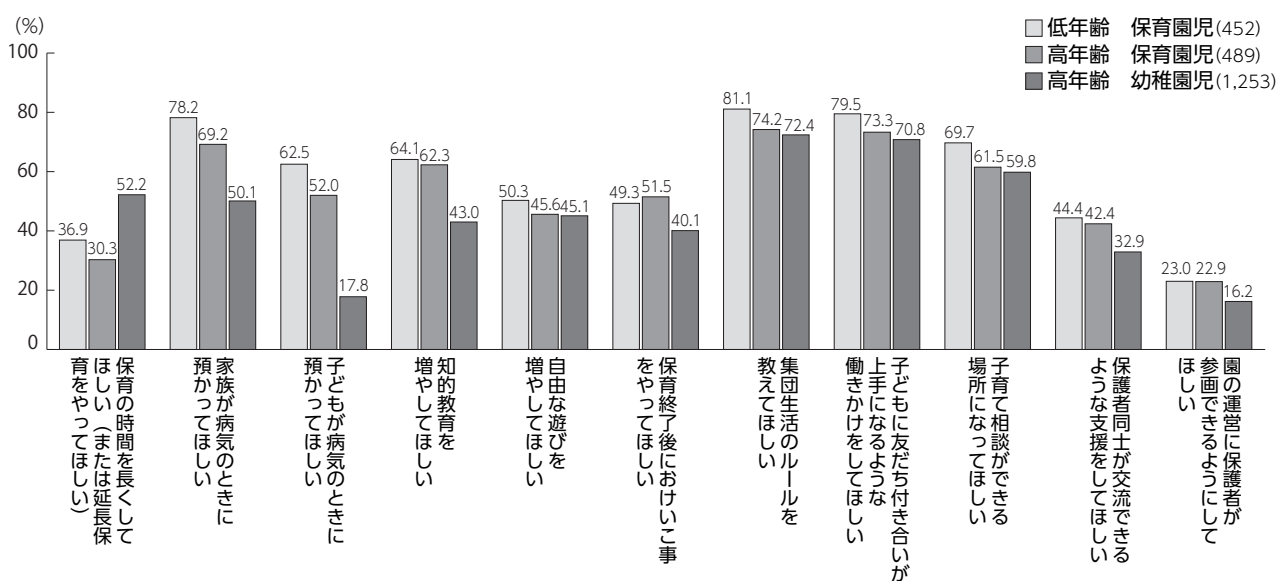
次に、子どもの就園状況別、年齢区分別に園への要望をみた結果が図2-7-2である。まず、同じ年齢区分の幼稚園児と保育園児（高年齢）の母親の結果を比較したところ、幼稚園児よりも保育園児（高年齢）のほうが要望としてあげる項目が全体的に多かった。保育園児（高年齢）のほうが10ポイント以上高かった項目は「家族が病気のとときに預かってほしい」（高年齢保育園児69.2%、幼稚園児50.1%。以下同）、「子どもが病気のとときに預かってほしい」（52.0%、17.8%）、「知的教育を増やしてほしい」（62.3%、43.0%）、「保育終了後においこ事をしてほしい」（51.5%、40.1%）であった。差がみられなかったのは「自由な遊びを増やしてほしい」（45.6%、45.1%）、「集団生活のルールを教えてほしい」（74.2%、72.4%）、「子どもに友だち付き合いが上手になるような働きかけをしてほしい」（73.3%、70.8%）など社会性に関する項目と、「子育て相談ができる場所

になってほしい」（61.5%、59.8%）であった。幼稚園児のほうが高かったのは「保育の時間を長くしてほしい（または延長保育をやってほしい）」（30.3%、52.2%）のみであった。

次に、保育園児の低年齢と高年齢の母親の結果を比べると、総じて低年齢の母親のほうが選択率が高かった。「保育の時間を長くしてほしい」（低年齢保育園児36.9%、高年齢保育園児30.3%。以下同）、「家族が病気のとときに預かってほしい」（78.2%、69.2%）、「子どもが病気のとときに預かってほしい」（62.5%、52.0%）、「集団生活のルールを教えてほしい」（81.1%、74.2%）、「子どもに友だち付き合いが上手になるような働きかけをしてほしい」（79.5%、73.3%）、「子育て相談ができる場所になってほしい」（69.7%、61.5%）であった。低年齢では子どもが病気にかかりやすいことや、子どもの年齢が幼いほうが、母親に「ママ友」が少なく、子育ての悩みを園で相談したいと考える母親がより多く存在する可能性が背景として考えられる。

これらの分析結果からは、幼稚園児よりも園で過ごす時間が長い保育園児の母親において、園への要望が多様であること、さらに高年齢よりも低年齢の子どもをもつ保育園児の母親のほうが、園に対する要望が多いことが明らかとなった。

図2-7-2 幼稚園・保育園への要望（就園状況別・年齢区分別 15年）



注1) 「とてもそう思う+まあそう思う」の%。
 注2) 母親の回答のみ分析。
 注3) 子どもを園に通わせている人のみ回答。
 注4) 調査時点における子どもの年齢区分は以下のとおりである。
 低年齢：1歳6か月～3歳11か月の幼児。
 高年齢：4歳0か月～6歳11か月の幼児。
 注5) ()内はサンプル数。